

四季と往く蒸気機関車

SLのすべて しんやかずお 新屋和夫写真集



秋

はじめに

登り勾配にさしかかると、重い荷を引いたSLは荒々しく煙を吐き、レールを噛み、全身をふるいたたせて力闘する。助けてくれる者は誰もいない。すべてが自分ひとりの孤独な闘いの連続。それはあまりにも哀れなSLの運命なのかも知れない。だが、いつも自分の力で行動し得ると言う事は、時にはまぶしい位に新鮮であり、うらやましい。

峠を登り切って坂を転がっていく姿は、ひたすら家路を急ぐ駄々っ子みたい。これほど喜怒哀楽を素直な態度でみせるヤツに、好感と興味を覚えずにはられない私。

今ではもう日本の地から引退してしまい、走る姿を見る事ができなくなってしまった。そして写真では動く姿を見ることはできないかも知れない。

だが私の生命あるかぎり、甦り、走りつづけるであろう蒸気機関車。SL
そのSLの四季折々の姿に目を通してくれる事は、この上ない喜びと感じる次第であります。

著 者

秋

ひまが許す限り、機会あるごとに、何時間何十時間かけて
数え切れない程 S L に会いに行ったあの頃。

雨が降ろうが、雪が降ろうが、台風が来ても三脚にカメラ
を乗せレリーズを持ち、おまえが来るのをじっと
待っていたあの頃。いろんなヤツがいたっけ。

大畑のループ線を回っていた D51。

流氷のオホーツク海を走っていた C58。

霧島越えをけむたそうにして走っていた貴婦人 C57。

S L 急行列車最後の役目を果たした C62。

キューロク (9600)、ハチロク (8620)、

シーチョンチョン (C11)。

みな、どんな顔ぶれを見てもなつかしいヤツ。

そうそう駄々っ子もいたっけ。おまえの顔を見ている
だけで楽しくなる私。おまえと一生を共にしたかった私。

そんな私の気持ちも知らないで、姿を消してしまったお
まえ。だが私は悲しみはしない。

たとえレールの上を走る姿を見る事ができなくても……。



ポニー
たたずまい
ふるさと
秋色
秋深し
築堤
寸景
うるしの木
9600 通過
鉄橋をゆく
D51 とたばこの葉
C57 三重連
秋をのせて
C57 が帰る
会津の里
山間にこだまする
力闘する C57
冬間近
C56
客車けん引
秋の訪れ
トウモロコシ畑
川畔
実のりの秋
山陰海岸



晩秋の影を落として

日南3号

山峡の秋

御地藏さん

南国のSL

ポタ山

東北の秋

快走する C55

秋のかほり

バック運転

石灰石を運ぶ D51

日南の朝

杉林

峠道

SLとの出会い

食事中

晴舞台

D51 三重連

呼吸を合わせて

煙たなびく C58

秋日和

一条の白い煙

重装備

ポニー

東北 小海線 甲斐大泉～甲斐小泉
篤進してくるC56には力強さよりも
かわいらしさが印象的だった。





たたすまい

東北 只見線 会津西方～会津宮下
涼風吹く会津の里を駆けあしするよう
にあわただしくC11が走ってゆく。



ふるさと

中国 山口線 津和野～船平山
ワラぶき屋根とSL、それは昔、子
供の頃見た、見覚えのあるなつかし
い景色だった。



秋色

北海道 石北本線 金華〜常紋 (信)

山々が徐々に色づいてゆくきびしい峠道
も色づいてゆくすばらしい季節だ！

秋深し東北

会津線 門田～上三寄

鳥居の彼方を走るC11を見た時そこには
会津の里を思わせる寸景があった。



築堤
中国 山陰本線 五十猛、仁万
C 57に引かれた客車が走る。山陰地方に朝が来た。





寸景

中国 山陰本線 小田ノ田嶺

そこにはボツンと御地蔵さんがあった。SLが来た。そして秋も来た。

うるしの木

北海道 深名線 鷹泊〜沼牛
うるしの木に囲まれた9600の姿があった。
そして私は、そこに秋のけはいを感じたような気がする。



9600通過

北海道 名寄本線 一ノ橋から上興部

力闘する9600のドラフト 昔も今も流れの速い川の音の前にはかき消されがちであった。





鉄橋をゆく
九州 田川線 崎山〜油須原
セキを従えて9600は力闘する。



D51とたばこの葉
九州 日田彦山線 香原く採銅所
石灰石を満載したS1が走る。
カーブを切ってD51は傾く。煙をかきながら



C57 三重連

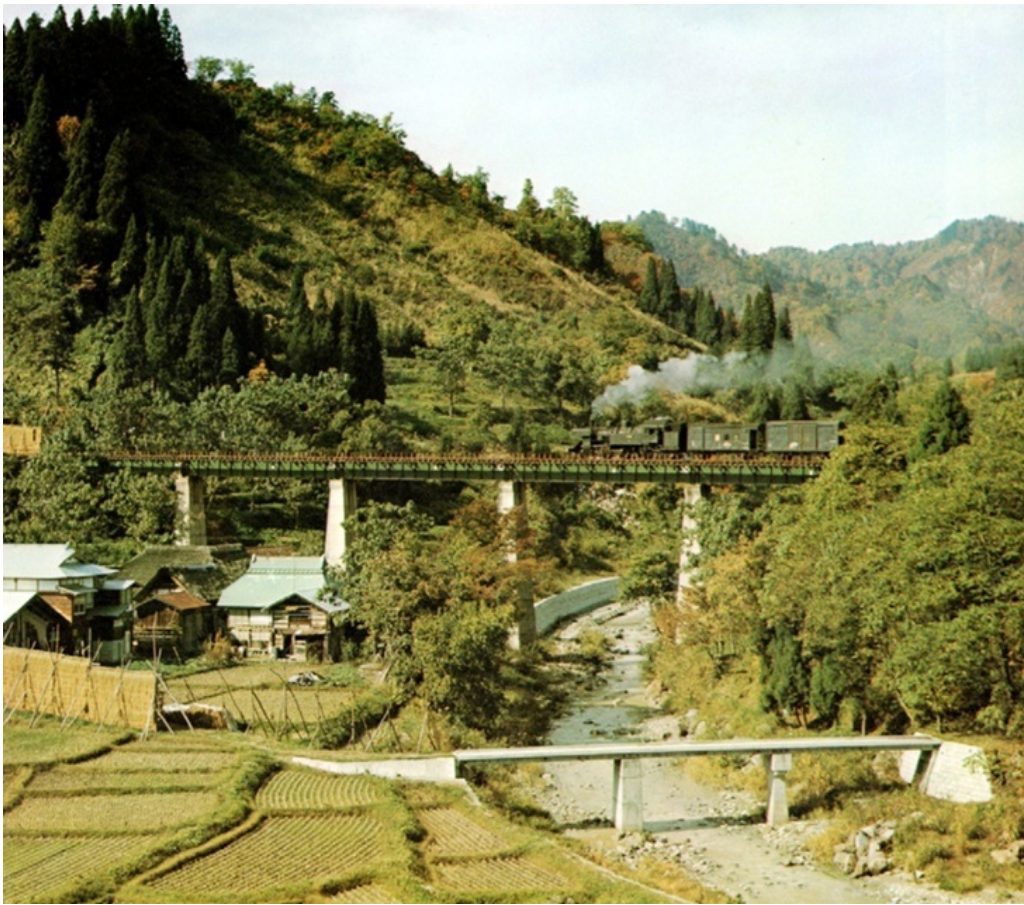
中国 播但線 生野～新井
C57 貴婦人が三台力を合わせて
峠を越えてゆく。



秋を乗せて
北陸 七尾線 能登中島〜西岸
稲も刈り終わり晩秋の鉄路を峠目指してC56は走る。

C 57が帰る
中国 山陰本線 五十猛〜仁方
晩秋の候、大築堤を貨物したがえC 57は走ってゆく。





会津の里

東北 只見線 会津大塩～会津横田

稲刈りも終わり、静かなたづまいの中に
ひっそりと走るC11の姿があった。

山間にこだまする

東北 只見線 滝谷付近

山あいにはひびき渡る汽笛。高くさえずり渡る鳥の声。そこには深まりゆく秋のドラマがあった。



力闘する C57

九州 日豊本線 国分～南霧島（信）
C57 の引く貨物列車が走る。25%の勾配をも
のともせず走る、力強く！時には華麗に！





冬間近

九州 日南線 榎原～日向大東
稲刈りも終わり柿も実った。
C11 はかるやかに走ってゆく。



C
56
北陸 七尾線 穴水〜能登三井
峠道を走るいつも見慣れた道。ノラスト音をひびかせ峠道を走る。



客車けん引

北陸 七尾線 能登中島〜西岸

C11がバック運転で走った。客車も引いた。実りゆく秋の中で！



秋の訪れ

東北 只見線 会津宮下～早戸

只見川に紅葉の季節が訪れる頃、東北地方にも秋の気配が漂う。



トウモロコシ畑

北海道 根室本線 赤平〜東滝川

実りゆくトウモロコシ畑の彼方を走ってゆく。脇目も振らずD51はゆく。



川岸

東北 只見線 会津水沼～会津中川
澄み切った川畔にC11の姿が写る。見慣れた会津の里の寸景。



実りの秋

九州 日南線 福島高松、福島今町

ノラスト音も高らかにC11が駆け抜けてゆく。
スズメもチユンチユンと啼いていた



山陰海岸
中国 山陰本線 八田く田儀
深まりゆく秋、快走するD51。海も青く、今日は空気がもうまい。



晩秋の影を落として

東北 只見線 会津檜原〜会津西方

只見線にかかるアーチ橋に、今にも関が沈む。
C11通過―それは一瞬の出来事だった。



日南3号

九州 日豊本線 清武→日向番掛
急「日南3号」の先頭に立つC57その名は貴婦人。
西日に照らされるその姿は美しい。



山峡の秋

東北 会津線 桑原～湯野上

会津の里にも秋が来た。深まりゆく秋が来た。
C11が貨物列車を従えて走って来た。



御地藏さん

東北 只見線 会津宮下〜早戸

そこにはひっそりとした、たまたまがあった。
心なしかSLの汽笛も物悲しく聞こえた。



南国のSL

九州 日豊本線 清武〜日向彦根

宮崎を後にした列車は峠を目指し息つくひまもなく走る。



ボタ山

九州 後藤寺線 船尾〜後藤寺

北九州にはボタ山が多かった。そして石炭を運ぶ列車も。



東北の秋
東北 会津線 湯野上り弥五島
夏の間せわしかった会津地方にも冬を待つ晩秋の姿があった。



快走するC55
九州 日豊本線 清武〜日向彦掛
のどかな景色が点在する日向の国。
C55ものどかに走っているようだった。



秋のかほり
九州 山野線 吉松〜栗野
柿が色づいていた。稲も刈り終わった。
秋を乗せてC12が走る。



バック運転
九州 後藤寺線 船尾〜後藤寺
2台の9600が息を合わせて走る。
セキを従えて走る。鉄橋渡る二人つれ。



石炭石を運ぶD51

九州 日田彦山線 香原採銅所

この地方に「蚊」がたくさんいるかは定かではないが、撮影中十数カ所「蚊」にさされた。



日南の朝

九州 日南線 南郷〜大堂津

はるか彼方小島が微笑みかけるようにC11に当たった。
そして透き通るような息を吐いて走り去った。



杉林
九州 志布志線 伊崎田↷安楽
蛇行する鉄路をぬうように志布志線の主C58が力闘する。



峠道

北海道 函館本線 小沢～倶知安
峠道を越えると倶知安までもう一息だ！「C 623 + D 51」の重連
背後から夕日を浴びて轟進する。



SJとの出会い

東北 花輪線 岩手松尾〜竜ヶ森
8620がハツと現れた。かけ抜けてゆく。
ススキに囲まれた秋の道。



食事中

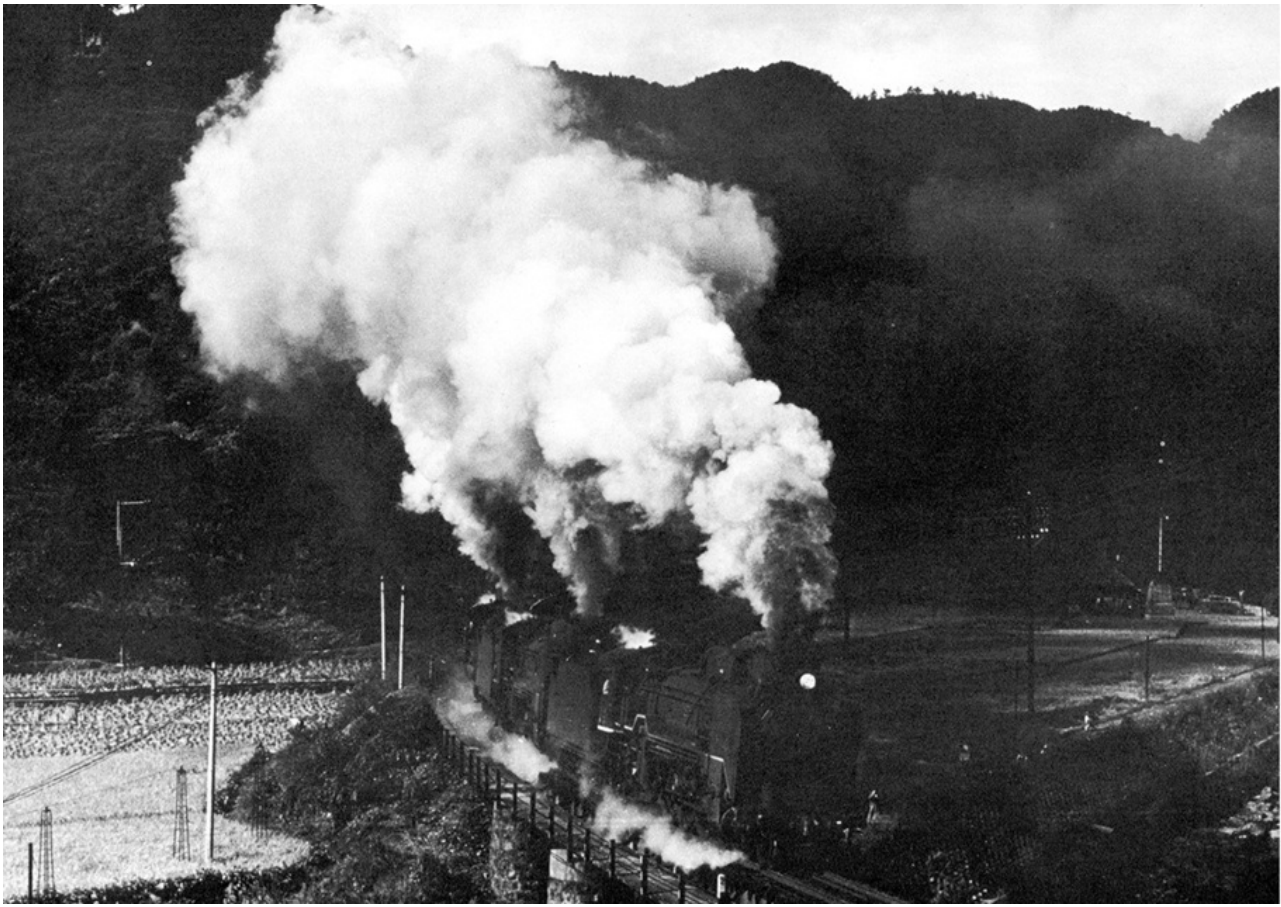
東北 只見線 会津水沼駅にて

そこには犬がいた。カップヌードルを買って食べさせた。
その背景には走り去るC11の姿があった。モデル料百三十円



晴舞台

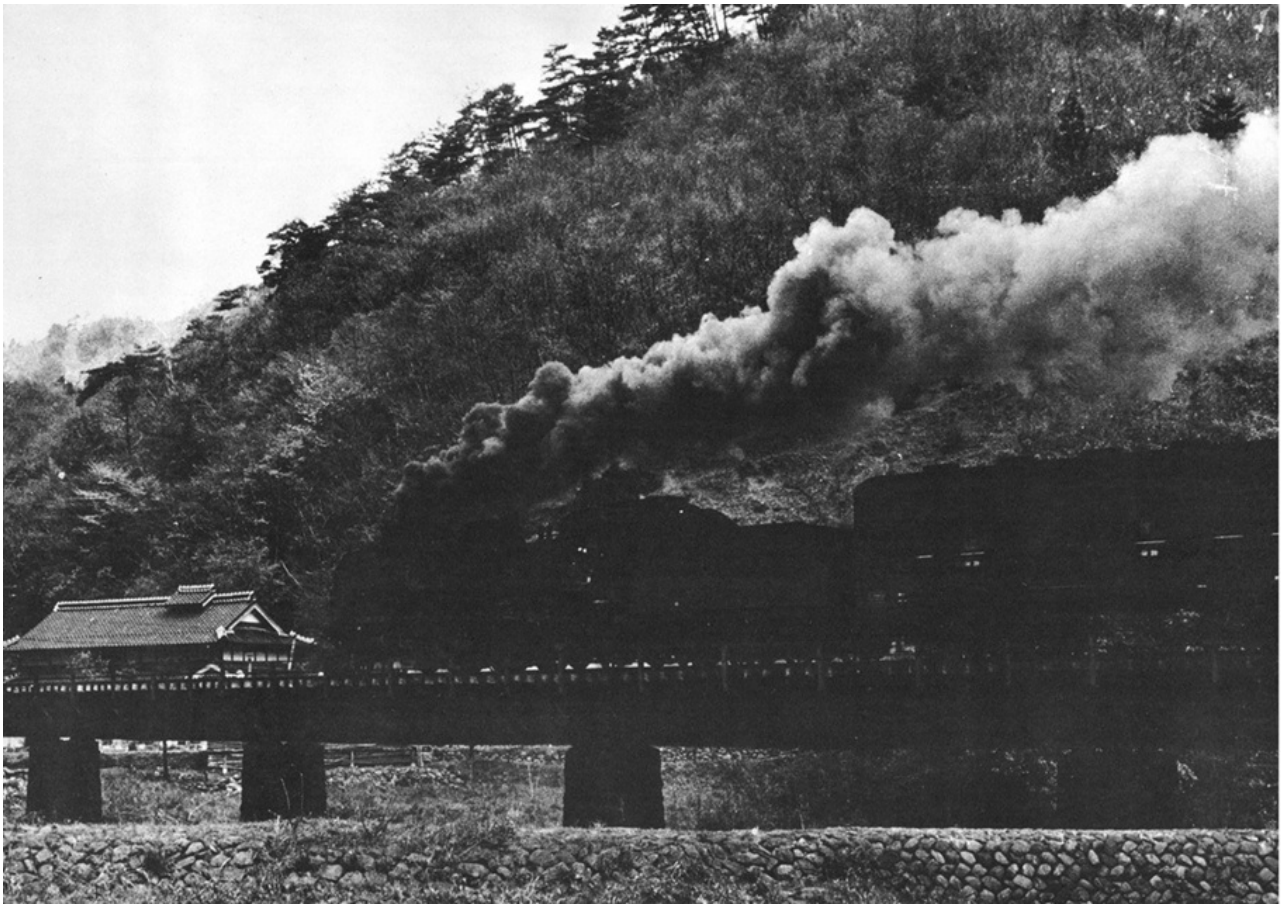
九州 日豊本線 国分〜南霧島 (信)
日豊本線にS15引継後の日が来た。幾度となく越えた思い出の峠道。



D51三重連
中国 伯備線 布原(信) 新見
布原信号を発車した三重連は鉄橋を渡りトンネルへ飛び込んでゆく。



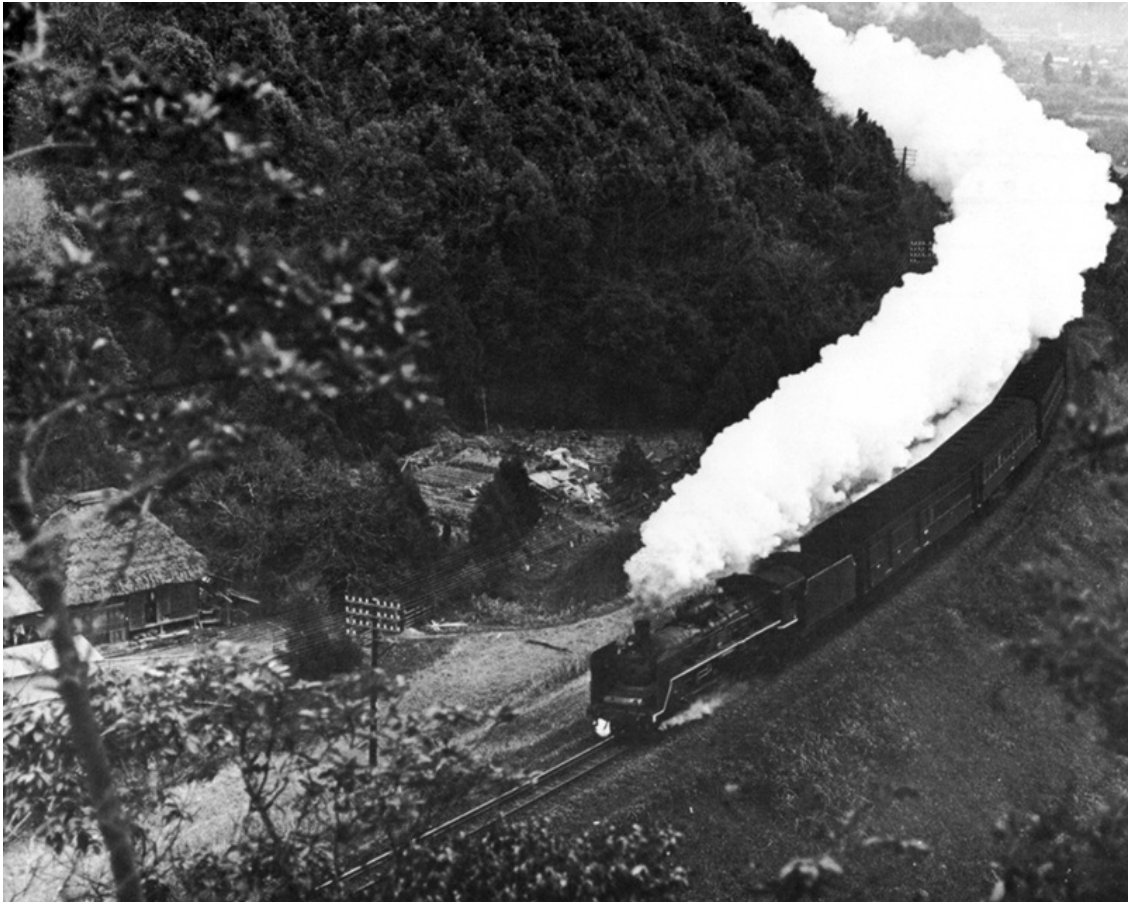
呼吸を合わせて！
九州 田川線 勾金く油須原
前に後に9600は走る。筑豊地方に力関する。



煙たなびくC58
中国 伯備線 布原(区) 備中神代
山々の木々も色あせてC58の走るこの線区でも冬の訪れを待っている。



秋日和
中国 伯備線 布原(信) 新見
朝ちやをうしてC58はゆく。



一条の白い煙

九州 肥薩線 大隅横川～栗野

C57の引く列車があつという間に真っ白い煙を残して走りすぎていった。
ワラフキ屋根の見える肥薩路。



重装備

北海道 函館本線 目名〜上目名
C62とD51のコンビが仲良く手に手を取り峠を越えてゆく。



四季を往く蒸気機関車・秋編

1977年4月 1日 紙版発行
2015年1月20日 デジタル版発行

著 者／新屋 和夫
プロデュース／竹下 博
デジタル制作／編集工房DEP

© Kazuo Shinya 2015
